

ライチョウ保全シンポジウム

ライチョウの未来、 新たなステージへ

講演要旨集

岐阜の県鳥“ライチョウ”指定 60 周年&ぎふライチョウ保全研究会発足記念
岐阜県生物多様性シンポジウム

日時 2025 年 10 月 5 日（日）

会場 岐阜大学応用生物科学部 102-103 番教室

国立大学法人東海国立大学機構岐阜大学，岐阜県，ぎふライチョウ保全研究会

岐阜大学構内は屋内外問わず**全面禁煙**です。

会場の応用生物科学部 102-103 番教室および玄関ロビーは飲食可能です。

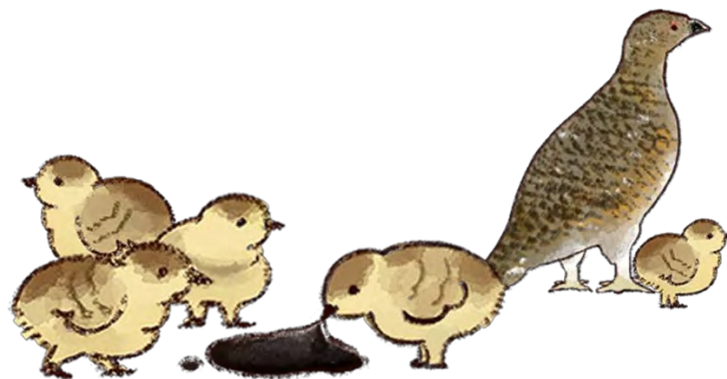
本日は休日のため大学生協は営業していませんが、大学バス停前のコンビニ（ミニストップ岐阜大学店）は営業しています。自動販売機は、応用生物科学部棟（B 棟側）内にもあります。

岐阜県「ぎふ環境学習ポータルサイト」（2025 年 9 月 18 日 開催案内掲載）

https://gifu-kankyo.pref.gifu.lg.jp/news/global_warming/p50298/



このシンポジウムは、「清流の国ぎふ森林・環境税」を活用し、岐阜県生物多様性シンポジウムとして開催しています。ぎふライチョウ保全研究会の設立および本シンポジウムの開催には、令和 7 年度岐阜大学技術交流研究会（岐阜大学協力会）の助成を受けています。なお、一部の講演および報告は、公益社団法人日本動物園水族館協会の MUFU 生物多様性保全研究助成事業の一環として実施中または実施予定の内容です。



イラスト：福井 杏

表紙写真：楠田哲士撮影（2025 年 7 月 11 日、乗鞍岳にて）

岐阜の「ライチョウ」と「らいちょう」

2020 年、「第 19 回ライチョウ会議ぎふ大会」が開催されました岐阜大学で、このたび「ライチョウ保全シンポジウム」を開催できますことを大変光栄に存じます。

ご承知の通り、今年はライチョウが国の特別天然記念物（文化財保護法）に指定されてから 70 年、さらに岐阜県の県鳥に指定されてからちょうど 60 年と節目を迎える年になっています。しかしその間、残念ながらライチョウの個体数は減少傾向を示しており、環境省のレッドリストでは絶滅危惧 IB 類（EN）に指定されています。

生息数の減少は、気候変動による生息環境の悪化、捕食者の増加、ニホンジカの食害による植生の変化などの影響であると考えられますが、このような問題への対応は野生動物を扱う分野だけでなく、広く生物、環境を研究対象とする本学部全体で真剣に考えていくべきものであると考えます。

また、様々な関係団体との連携も重要で、例えば岐阜県とは、本学と共同設置している岐阜県野生動物管理推進センターと本学部附属野生動物管理学研究センターが密接に連携しながら、保全活動に取り組んでいます。さらに今年、本学部の動物保全繁殖学研究室や、日本野鳥の会岐阜、日本山岳会岐阜支部が中心となって「ぎふライチョウ保全研究会」が設立され、ライチョウの保全や啓発活動を進められています。

さて、先日 8 月 24 日、岐阜県内の工業高校、岐阜大学、そして関連企業が関わる「ぎふハイスクールサット (GHS) プロジェクト」で制作した超小型人工衛星 GHS-01 が、Space X 社のロケット Falcon 9 で国際宇宙ステーションに送られ、9 月 19 日に無事、高度 400 km の軌道に投入されました。この GHS-01 はその名も「らいちょう」で、岐阜県の高校生の希望を載せて地球を現在も周回しています。

「ライチョウ」と「らいちょう」、どちらも岐阜の地から「頑張れ！」とエールを送る年にしていこうではありませんか！

2025 年 10 月

岐阜大学 応用生物科学部

学部長 **西 津 貴 久**

ライチョウの保護からはじめる生物多様性保全の推進

令和 7 年度岐阜県生物多様性シンポジウム「ライチョウ保全シンポジウム」にご参加いただきありがとうございます。

今年はライチョウが県の鳥に指定されてから 60 周年、つまり、岐阜県においてライチョウは還暦を迎えたというたいへん喜ばしい年となります。

岐阜県では、平成 31 年に「岐阜県ライチョウ保護計画」を策定し、この計画に基づき、ライチョウの生息状況調査、ライチョウの生息に影響を及ぼすニホンジカなどの野生生物の侵入状況の調査、県内のイベントでの PR 活動、乗鞍岳でのライチョウツアーなどの環境教育を実施しています。

ライチョウの生息地は、岐阜県内では笠ヶ岳、乗鞍岳、御嶽山と限られておりまして、飛騨地域以外に住んでいる県民のみなさまにとっては、少々身近に感じにくいところもあるかと思います。

このシンポジウムでは、ライチョウの生息域内及び生息域外での最新の保全事業をはじめ、岐阜県内で行われているライチョウに関する調査研究を紹介いただき、岐阜県のライチョウの今、そして未来のことをみなさまとともに考えるきっかけとなりましたら幸いです。そして、ライチョウに興味を持たれましたら、ぜひライチョウの生息地を訪れていただき、高山帯の景観のすばらしさ、動物・植物といった生物の多様性を感じていただければと思います。

県では、今後も「ライチョウ」をシンボルとして生物多様性保全を推進してまいりますので、みなさまのご理解とご協力をお願いいたします。

2025 年 10 月

岐阜県環境エネルギー生活部

環境生活政策課

課 長 大 川 敦

ライチョウ保全シンポジウム プログラム

●12:30 開場・受付

●13:00 司会 小田望由（岐阜県環境エネルギー生活部 環境生活政策課 生物多様性係 技師）

開会挨拶 西津貴久（国立大学法人東海国立大学機構岐阜大学 応用生物科学部長）

大川 敦（岐阜県環境エネルギー生活部 環境生活政策課長）

●13:10～14:40 第1部 ライチョウの保全事業 ～生息地と動物園～

〔講演1〕復活した中央アルプスのライチョウと今後の課題

中村 浩志（信州大学名誉教授／一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所 代表理事）

〔講演2〕神の鳥“ライチョウ”を育てる動物園の飼育繁殖大作戦

秋葉 由紀（富山市ファミリーパーク 飼育展示第二係長）

—休憩—

●14:55～16:00 第2部 岐阜県での活動 ～調査研究紹介～

（報告①）岐阜県でのこれまでのライチョウ調査と御嶽山の状況

福井 強志（日本野鳥の会岐阜 監事）

（報告②）ライチョウの山の“いま” —ニホンジカを中心とした哺乳類の生息状況（乗鞍・御嶽）—

森 智基（岐阜県野生動物管理推進センター／岐阜大学応用生物科学部附属

野生動物管理学研究センター 特任助教）

（報告③）動物園と連携したライチョウ繁殖推進のための生理調査

斉藤 真子（岐阜大学大学院自然科学技術研究科 修士課程）

—休憩—

●16:20～17:40 第3部 ライチョウ保全の未来

〔講演3〕ライチョウからみる希少野生動物保全の今後

福田 真（環境省信越自然環境事務所 生息地保護連携専門官）

（報告④）ぎふライチョウ保全研究会の設立 ～岐阜県でのこれから～

楠田 哲士（岐阜大学応用生物科学部 教授／ぎふライチョウ保全研究会 会長）

○ライチョウお菓子「ぎふっくらいちょう」 お披露目

岐阜大学社会システム経営学環三井ゼミ「ライチョウお土産プロジェクト」チーム

○ライチョウクッキー kurimaro collection × 繁殖研コラボ 試作品 お披露目

いきものクッキーアート専門店 kurimaro collection

○岐阜県ライチョウ紙飛行機 お披露目

アンドリュー・デュアー（紙飛行機作家／東海学院大学 教授）

●17:40 閉会挨拶 柴田 真治（公益社団法人岐阜県獣医師会 会長）

（進行状況によりスケジュールに変更が生じる場合があります）

第1部 ライチョウの保全事業

～生息地と動物園～

講演1 『復活した中央アルプスのライチョウと今後の課題』

中村 浩志（信州大学名誉教授／一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所 代表理事）

講演2 『神の鳥“ライチョウ”を育てる動物園の飼育繁殖大作戦』

秋葉 由紀（富山市ファミリーパーク 飼育展示第二係長）

2018 年，ライチョウが絶滅した中央アルプスに半世紀ぶりに 1 羽の雌ライチョウが飛来した（写真 1）。この雌の飛来を契機に，環境省の第 2 期ライチョウ保護増殖事業の一環として 2020 年から中央アルプスにライチョウを復活させる事業がスタートした。

2020 年には乗鞍岳でふ化直後の 3 家族をケージに収容し，1 ヶ月間，悪天候と捕食者から人の手で雛を雌親と共に守ってやるケージ保護を実施した。その 3 家族計 19 羽（雌親 3 羽＋ヒナ 16 羽）を 8 月にヘリで中央アルプス木曽駒ヶ岳に空輸し，現地の環境に慣らした後に放鳥した。この 19 羽に飛来雌 1 羽を加えた計 20 羽を基に，中央アルプスにライチョウを復活させる事業が本格的に開始された。その結果，翌 2021 年には 20 羽のうち 18 羽（雄 8 羽，雌 10 羽）が翌年まで生き残り，1 歳となった 8 羽の雄は中央アルプス北端の将棋の頭から中央部の熊沢岳にかけて 8 なわばりを確立し，繁殖した（図 1）。



写真 1 半世紀ぶりに中央アルプスに飛来した雌

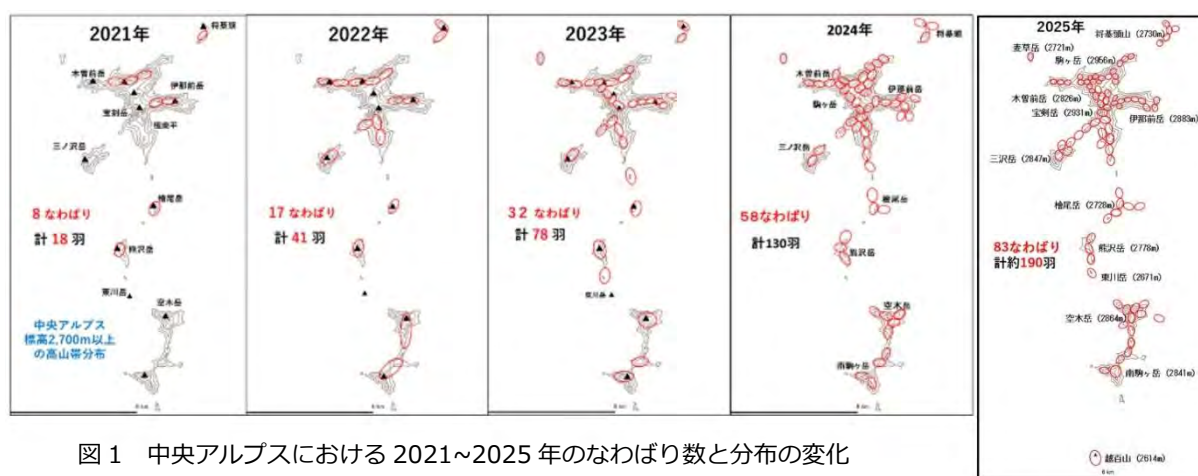


図 1 中央アルプスにおける 2021～2025 年のなわばり数と分布の変化

2022 年以後は，中央アルプスで繁殖するライチョウの数となわばり数は，共に毎年 2 倍，2 倍，2 倍に増加し（図 1 参照），2025 年の繁殖数は 200 羽ほど，なわばり数は 85 に増加し，2020 年に 20 羽から始まった繁殖数は 5 年後にはその 10 倍に増やすことができた。その結果，中央アルプスで繁殖するライチョウの数は，もとの乗鞍岳の集団（約 150 羽）を超えるまでになった。中央アルプスでライチョウが繁殖する環境は，標高 2700m 以上が目安となるが，2025 年には中央アルプスの 2700 m 以上の環境はほぼなわばりで埋め尽くされるまでになり，主峰の木曽駒ヶ岳周辺は，ロープウェイを使えば日帰りでライチョウに会える日本で最も手軽にライチョウに会える山になった。たった 5 年で中央アルプスにライチョウを完全に復活させることに成功したのである。

このように短期間に絶滅危惧種の繁殖集団を復活した例は、世界的にも例がなく、まさに奇跡の復活といえる。これが可能であったのは、ライチョウの生息現地でのケージ保護という保護対策技術の確立と動物園で人の手で育てたライチョウを山に戻す野生復帰技術の確立によるところが大きい。

今後は、ケージ保護や野生復帰といった人の手でライチョウを増やすことはせず、復活した中央アルプスのライチョウ集団が人の手を借りなくても集団を維持できるかどうかを 3 年間見守り、可能と判断された場合には 2029 年にライチョウを現在の絶滅危惧 IB 類から元の II 類にランクダウンすることになった。

今回の 5 年間の事業を通し、中央アルプスにライチョウを復活させることに成功しただけでなく、中央アルプスからニホンザルを撃退することにも成功した。今から 40 年ほど前、ライチョウの棲む高山帯にニホンザルは生息していなかった。それが、その後平地で数を増やし、現在ではライチョウが生息する多くの高山に侵入するまでになった。復活事業を開始した 2020 年当時には、夏になると木曽駒ヶ岳周辺でもニホンザルの群れが時々観察されていたが、2021 年から開始した徹底的な追い払いの結果、5 年後の 2025 年には、木曽駒ヶ岳周辺でサルを見かけることはなくなった。5 年間でサルの撃退にも成功したのである。

木曽駒ヶ岳で確立したサルの撃退方法を他の山岳でも今後実施し、登山者の協力も得て、ライチョウの生息する高山帯からサルを追い払うことに協力していただくポスターを環境省が制作した（図 2）。今後は、高山帯で登山者がサルを見かけたら、手を叩くか大声を出して追い払っていただくことになった。

絶滅した中央アルプスにライチョウを復活させることに成功したとはいえ、以前からライチョウが生息していた北アルプスや南アルプス等では、現在も低山から侵入したニホンジカ、ニホンザル等による高山のお花畑の食害、キツネ、テン、カラス、チョウゲンボウ等の同じく低山から侵入した捕食者によるライチョウの捕食、さらには地球温暖化の問題に直面している。

日本のライチョウをここまで追い詰めたのは、高度成長期を経験した私の世代の責任である。ケージ保護と野生復帰技術を確立したことで、当面は日本のライチョウの絶滅の危機を回避できたとはいえ、世界で唯一人を恐れない神の鳥であるライチョウを今後も日本の高山に残せるかは、次の世代に引き継がれる課題となった。



図 2 サル対策ポスター（環境省作製）

中村 浩志（なかむら ひろし）

信州大学名誉教授・一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所 代表理事。専門は鳥類生態学。ライチョウ会議議長。学生のころからライチョウに関する研究を行い、信州大学退職後の現在もライチョウの調査と保護活動に取り組む。中央アルプスにライチョウを復活させる環境省事業の総指揮をとり、事業の成功に貢献したことから、2024 年の秩父宮記念山岳省を受賞。

ニホンライチョウ（*Lagopus muta japonica*、以下、ライチョウ）は、本州中央にある日本アルプスの標高 2,200～2,400m以上の高山帯に生息する鳥類である。近年は捕食者（キツネ、テン、カラス等）の分布拡大、ニホンジカ、ニホンイノシシによるライチョウの餌となる高山植物群の食害、および気候変動による生態環境の縮小が原因となり、その生息が脅かされている。ライチョウの生息数減少を受け、環境省は 2012 年 10 月に「ライチョウ保護増殖事業計画」を策定し、ライチョウの保全が始まった。

ライチョウの保全には、ライチョウが生息する環境を守る「生息域内保全」事業、動物園で飼育し繁殖させる「生息域外保全」事業と、そして動物園で増えたライチョウを山に戻す「野生復帰」事業がある。公益社団法人日本動物園水族館協会は、2014 年に環境省との間で締結した「生物多様性保全の推進に関する基本協定書」に基づき、2015 年からライチョウ保護増殖事業における生息域外保全事業を開始し、スバルバルライチョウおよびライチョウ飼育園館が協力し様々な検討を行いながら、飼育・繁殖技術開発に尽力してきた。特にライチョウを増やし育てる繁殖については、野生ライチョウに比べて産卵数が多い、雛の成育率が低いなどの課題があるとされてきた。富山市ファミリーパークでも、飼育員が親代わりに雛を育てる人工育雛や母鳥が雛を育てる自然育雛に取り組みながらこれらの問題解決を進めてきた。さらに、ここ数年は繁殖技術のさらなる発展のため、野生雄個体からの採精と飼育雌への人工授精を実施するなど積極的な技術開発を行っている。また、これまでに得られた知見を生かし、環境省が行う野生復帰事業へ協力し、令和 6～7 年度には動物園で人工孵化・育雛した個体の放鳥に取り組んだ。

動物園の役割は、近年大きく変化してきた。レクリエーションの場であった動物園も、自然を守り、動物を守ること、さらには環境教育・普及啓発を積極的に進めていくことが求められている。動物たちの命と向き合ってきた経験を活かし、ライチョウの繁殖技術の向上を目指しながら、ライチョウを守る取り組みを動物園がどのように行ってきたのか、動物園の取り組みを紹介する。

秋葉 由紀（あきば ゆき）

富山市ファミリーパーク 飼育展示第二係長・獣医師。2010 年からスバルバルライチョウ、また 2015 年のニホンライチョウの飼育開始当初から担当獣医師として健康管理に関わり、2018 年から公益社団法人日本動物園水族館協会生物多様性委員会ライチョウ計画管理者として、日本の動物園でのライチョウ生息域外保全事業の総指揮をとる。

第2部 岐阜県での活動

～調査研究紹介～

報告①『岐阜県でのこれまでのライチョウ調査と御嶽山の状況』

福井 強志（日本野鳥の会岐阜 監事）

報告②『ライチョウの山の“いま”—ニホンジカを中心とした哺乳類の 生息状況（乗鞍・御嶽）—』

森 智基（岐阜県野生動物管理推進センター／岐阜大学応用生物科学部附属
野生動物管理学研究センター 特任助教）

報告③『動物園と連携したライチョウ繁殖推進のための生理調査』

斉藤 真子（岐阜大学大学院自然科学技術研究科 修士課程）

岐阜県におけるライチョウの生息調査は、乗鞍岳、御嶽山、笠ヶ岳の3つの山域で行われている。いずれも10年程度の間隔で行い、縄張り数と個体数などを推定している。

乗鞍岳は岐阜県ライチョウ研究会（1974）が1973年の調査によって54の縄張り数を推定した。1983年には岐阜県からの委託で日本野鳥の会が調査を行い、59の縄張り数を推定した。1994年にも同様の調査を行い48の縄張り。その後2003年から2005年にかけて県が調査を行い、40の縄張り数を推定している。

笠ヶ岳は抜戸岳、笠ヶ岳北西尾根、南西尾根を調査地として、1985年に調査を行い19の縄張り数を推定した。1996年にも同様の調査を行い、17の縄張り数を推定した。その後20年を経て2017年に岐阜県が調査を実施し19の縄張り数を推定した。

御嶽山は1984年に全域調査を行い39の縄張り数を推定し、1995年も同様に行い35の縄張りだった。その後20年あまりを経て、2016年に火山噴火の影響から岐阜県側中心の調査となったが15縄張りを推定した。このように3つの山においては縄張り数の大きな変化は認められなかった。しかし乗鞍岳については、最近では畳平周辺でのライチョウ確認数が減ったことが報告されている。乗り入れバス便の増加による入山者数の増加などが考えられ、「人を恐れない鳥」から「人を嫌がる鳥」へ変化しているのではと思われる。

御嶽山については岐阜県のレッドデータブック改定委員として、鳥類調査を毎年行ってきた。特に2024年と2025年はライチョウの縄張り数について実施した。過去3回の調査と比較するため、御嶽山北部の北御嶽といわれる、継子岳から四ノ池、五の池、三ノ池、摩利支天乗越までとした。これは各年の報告書においてAブロックとして区分し、縄張り数を出している。表1から1984年・

表1 Aブロック（継子岳、三ノ池、四ノ池、五の池）の縄張り数

調査年	縄張り数	調査者
1984年	15	日本野鳥の会 岐阜
1995年	15	日本野鳥の会 岐阜
2016年	11	日本野鳥の会 岐阜
2024年	10	福井
2025年	10	福井

1995年は15縄張りと変化がなかったが、2016年・2024年・2025年は11縄張り・10縄張りとなし、4～5縄張りが減少し、生息状況が悪化したと考えられる。近年の高温傾向による雪解け時期の早期化、高山帯環境の変化、捕食圧の変化など様々なマイナス要因があると考えられる。しかしこれより多く縄張りを確認したとの情報もあり、今後のより精度の高い調査の必要性が求められている。

福井 強志（ふくい つよし）

日本野鳥の会岐阜 監事。岐阜県レッドリスト・外来種リスト調査検討委員会委員などを務め、岐阜県内の鳥類調査・保護活動等を行う。過去に、岐阜県で行われたライチョウ生息状況調査に参加し、現在も御嶽山等でライチョウの生息状況の調査を行っている。

報告

②

ライチョウの山の“いま” —二ホンジカを中心とした哺乳類の生息状況（乗鞍・御嶽）—

森 智基（岐阜県野生動物管理推進センター／
岐阜大学応用生物科学部附属野生動物管理学研究センター）

近年の高山帯において、ライチョウは二ホンジカ（以下、シカ）の高山帯への侵入・定着に伴う生息地劣化や一部の中型哺乳類（二ホンザル・キツネ・テンなど）による捕食という二重の脅威にさらされている。とくに、シカの高山帯への侵入は、下層植生の衰退を通じてライチョウの餌となる植物や昆虫資源を減少させる懸念が大きい。南アルプスにおいて、シカの定着後わずか十年余りでお花畑が消失したことは有名であり、シカの高山帯侵入に伴う植生改変の速度と不可逆性は無視できない。

こうした状況を踏まえ、岐阜県野生動物管理推進センターでは 2023 年以降、7～10 月にかけて乗鞍岳と御嶽山の亜高山帯から高山帯においてカメラトラップ調査を実施し、シカと中型哺乳類の侵入状況についてモニタリングを行っている。今年度も調査は実施中であるが、今回はこれまでに得られている 2023 年と 2024 年の 2 ヶ年分のデータを用いて、現時点の結果を報告する。

シカについては、2023 年と比べて 2024 年に撮影数が増え、乗鞍岳では 2023 年に 1 頭しか撮影されていなかったシカが 2024 年には計 6 頭（うちメス 3 頭 [おそらく同一個体が 3 回撮影]）撮影された。御嶽山でも 2024 年にはシカが撮影され、計 7 頭（すべてオス）が確認された。一般に、シカの分布はまずオスが先行して新たな生息地を開拓し、その後メスが追随する形で進行することが知られている。乗鞍岳でのメスの確認は、高山帯への定着段階の初期へ移行しつつあることを示唆する。御嶽山においてはまだメスは確認できなかったが、オスのみの撮影は侵入初期に典型的なパターンであり、定着に至る前段階にあると考えられる。一方、中型哺乳類については、乗鞍岳の亜高山帯～高山帯においてキツネの出現が相対的に高く、御嶽山ではテンやその他のイタチ科（イタチやオコジョ等）の出現頻度が高かった。

以上の結果は、高山帯におけるシカの侵入と中型哺乳類（キツネやテンなど）がライチョウに対しての潜在的な脅威として作用し得ることを示す。したがって、今後もシカの侵入状況や中型哺乳類のモニタリングを継続したうえで、状況に即した対応の在り方を検討していく必要がある。

森 智基（もり ともき）

岐阜県野生動物管理推進センター、岐阜大学応用生物科学部附属野生動物管理学研究センター 特任助教。専門は動物生態学。大型哺乳類（ツキノワグマ・二ホンジカ）の生態や管理をテーマに、御嶽山と乗鞍岳のライチョウ生息地での二ホンジカ侵入状況や伊吹山での二ホンジカの調査に取り組む。

報告

③

動物園と連携したライチョウ繁殖推進のための生理調査

齊藤 真子¹・金原 弘武²・小笹 美紅³・楠田 哲士¹⁻³

(¹ 岐阜大学大学院自然科学技術研究科, ² 岐阜大学大学院連合農学研究科,

³ 岐阜大学応用生物科学部)

飼育下ライチョウの繁殖生理調査は、当動物保全繁殖学研究室において、2011 年から同種で別亜種のスバルバルライチョウ (*Lagopus muta hyperborea*), 2015 年からニホンライチョウ (*L. m. japonica*) を対象に動物園と共同で行っている。本種の繁殖生理を内分泌学的に把握することは、生息域外保全における飼育繁殖技術の向上につながる。

温帯に生息する鳥類は一般的に、日長の変化が刺激となり生殖腺の発達や羽の生え変わり（換羽）が起きることで、年間の繁殖スケジュールが調整されているが、気温によっても産卵や換羽の時期を微調整されていると考えられる。野生のニホンライチョウは高山環境の中で、なわばり確立、つがい形成、産卵、抱卵、育雛を毎年 4 月中旬～9 月下旬に行う。また、1 年に 3 回換羽をすることや、繁殖や換羽に合わせた季節的な体重変化が起きることが報告されている。一方、動物園のニホンライチョウはその出身地である生息地の乗鞍岳の日長にあわせた照明環境で飼育しているものの、野生とは異なる要素が多々あるため、どのような環境変化を感じ取り、繁殖や換羽を行っているのかは不明な点が多い。

ニホンライチョウについて、2015 年から現在まで、8 つの飼育施設（那須どうぶつ王国、恩賜上野動物園、横浜市繁殖センター、金沢動物園、長野市茶臼山動物園、市立大町山岳博物館、富山市ファミリーパーク、いしかわ動物園）で飼育された雄 30 羽、雌 31 羽を対象に繁殖生理の調査を行ってきた。動物園で糞の採取と毎日の飼育条件や個体の状態の記録をしていただき、糞中に含まれる性ホルモン代謝物の濃度変化を、照明時間や気温、繁殖記録、換羽状況、体重変化と比較することで調べている。

鳥類は一般的に、光刺激を脳が受け取ると、生殖腺を刺激するホルモンが分泌され、雌の卵巣からは卵胞成長を促すエストラジオール-17 β と排卵を促すプロジェステロンが、雄の精巣からは精子形成を促すテストステロンが分泌される。飼育下ニホンライチョウにおいて、糞中のこれらの性ホルモン代謝物濃度がつがい形成や産卵が起きる 5～6 月に高値を示すことや 1 年に 3 回換羽が起きることなど、おおむね明瞭な季節変化を示したが、年を経るにつれ、体重の季節変化は不明瞭になる個体が多くみられた。また、雌個体において気温差が冬羽から繁殖羽への換羽を促進している可能性があることが分かってきた。今後もライチョウの繁殖生理についてさらに調査を続け、生息域外保全における飼育・繁殖技術の向上に貢献できればと考えている。

齊藤 真子（さいとう まこ）

岐阜大学大学院自然科学技術研究科 修士課程 2 年（動物保全繁殖学研究室）。動物園生物学研究センター・ぎふライチョウ保全研究会所属。動物園でのライチョウ生息域外保全における適正繁殖推進のために、性ホルモンと換羽状況などを分析し、繁殖の生理生態の研究を行っている。

第3部 ライチョウの未来

講演3 『ライチョウからみる希少野生動物保全の今後』

福田 真（環境省信越自然環境事務所 生息地保護連携専門官）

報告④ 『ぎふライチョウ保全研究会の設立 ～岐阜県でのこれから～』

楠田 哲士（岐阜大学応用生物科学部 教授／ぎふライチョウ保全研究会 会長）

●ライチョウお菓子「ぎふっくらいちょう」 お披露目

岐阜大学社会システム経営学環三井ゼミ「ライチョウお土産プロジェクト」

●ライチョウクッキー × 繁殖研コラボ 試作品 お披露目

いきものクッキーアート専門店 kurimaro collection

●岐阜県ライチョウ紙飛行機 お披露目

アンドリュー・デュアー（紙飛行機作家／東海学院大学 教授）

ライチョウからみる希少野生動物保全の今後

福田 真（環境省信越自然環境事務所）

ライチョウの保全は、南アルプスでのケージ保護及び捕食者対策の実施による域内保全技術の確立から始まり、現在は絶滅地域の中央アルプスで復活プロジェクトが進行している。中央アルプスで実施されているのは域内・域外保全を組み合わせた保全技術の最終段階となる野生復帰事業であり、この技術が確立されればライチョウ保全技術がひとまとまりのパッケージとなる。ライチョウ保護増殖事業が本格的に開始されてから 10 年ほどの短期間に、保全のための技術確立の目処が立ったことになる。こうした短期間での成果は、十分な基礎研究が事前になされていたことや、検証体制を整えての試験的な実施のもとにデータを集めたこと、指揮をとる有識者が現場で指揮をとり続けていることなどが挙げられる。特に、捕食者対策や火打山でのイネ科除去事業のように、国立公園の特別保護地区とされるような場所で起きている環境変化に対して「見守るだけでは守れない」というスローガンのもとに、積極的に人の手を加える保全を行ってきたことは特筆すべきことである。ライチョウ事業の成果が、今後の希少野生生物の保全にとって、技術的なことだけでなくこれからの自然環境と向き合う姿勢のあり方まで示すことができるのではないかと考えている。

福田 真（ふくだ まこと）

環境省信越自然環境事務所 生息地保護連携専門官。学生時代、信州大学で中村浩志教授の生態学研究室に所属していた。2015 年度から 2019 年度まで信越自然環境事務所でライチョウの保護増殖事業等を担当。その後、2025 年度に再び信越自然環境事務所に着任し、ライチョウの保護増殖事業等の業務を担当する。

ぎふライチョウ保全研究会の設立 ～岐阜県でのこれから～

楠田 哲士（岐阜大学応用生物科学部／ぎふライチョウ保全研究会）

今年は、ライチョウに関わる様々なことが節目を迎えている。昭和 40（1965）年 5 月 10 日、岐阜県のシンボルとして県鳥に“ライチョウ”が指定された。今年はそれから 60 年（還暦）になる。また、1955 年に特別天然記念物（文化財保護法）に指定されてからも 70 年である。

ライチョウにおいて、保護増殖事業の一環として生息域外保全が開始（動物園に導入）されたのが 2015 年であり、それから 10 年でもある。当動物保全繁殖学研究室は、日本動物園水族館協会（JAZA）の生息域外保全事業における繁殖生理研究を当初から担当してきたため、私たちにとっても 10 周年の節目となった。

余談だが、岐阜大学、岐阜県内の工業高校および企業が協力して制作し、今夏に宇宙へ旅立った超小型人工衛星「ぎふハイスクールサット（GHS）1 号機（GHS-01）」は、県内の高校生に対する愛称募集で「らいちょう」と名付けられている（右図）。



偶然にも、そんな様々な記念年が重なった今年のはじめ、日本山岳会岐阜支部と日本野鳥の会岐阜の有志からライチョウの保全に関する会を立ち上げたいとの相談を受け、当研究室が加わり、「ぎふライチョウ保全研究会」を設立した（次頁の「東海国立大学機構 環境報告書 2025」参照）。他のライチョウ生息県には、ライチョウに関わる研究機関や保全組織（動物園・博物館を含む）があるが、岐阜県内には核となる集まりがないことが長年問題視されてきた。このような状況に関係しているのか、岐阜県でのライチョウに対する関心度は、他の生息県よりはるかに低い。2020 年に、岐阜大学で第 19 回ライチョウ会議ぎふ大会を開催したが、その開催目的の 1 つが、岐阜県でのライチョウ関心度の向上であった。それ以降も様々な企画を継続してきた。同じく県鳥に指定する富山県や長野県とは比にならない低さであるものの、過去 20 年間をみれば、関心度は相対的に緩やかに上がってきている。

ライチョウ会議ぎふ大会を開催した 2020 年は、その前年（2019 年）から開始された中央アルプスでの野生復帰事業の中で様々な課題を抱えていた。2020 年に実施された 2 つの野生復帰手法のうちの 1 つが成功し、そのときの個体が繁殖して、中央アルプスでの個体数増加が始まっている。ぎふ大会時は、その試行錯誤や計画段階にある講演内容が多かった（ぎふ大会の講演要旨集参照▶ <https://www1.gifu-u.ac.jp/~lar/ptarmigan/img/raicho19.pdf>）。ぎふ大会時のサブタイトルには、野生復帰事業が始まったことを捉えて、「新たなステージへ」と付けた。あれから 5 年が経過し、というよりたった 5 年で、環境省レッドリストの絶滅危惧カテゴリーのダウンリスト（2029 年度、絶滅危惧 IB 類→II 類）と保護増殖事業の一旦終了（2030 年度以降）の見込みが今年発表されるにまで至った。今回のサブタイトルにも「新たなステージへ」と付けた理由であり、さらに次のステージに向かっている。

生息地ごとにみれば、ライチョウを取り巻く環境はまだまだ厳しく、多くの課題が山積している。個

体数が安定していると考えられてきた乗鞍岳でさえ、最近是不安視されている。今後、国の保護増殖事業が終了していく未来を見据えれば、それぞれの生息県での活動や監視がさらに重要になる。またほとんどの生息地は隣県との境界に位置することから、生息県間（岐阜県から見れば、長野県や富山県）との連携が非常に重要である。岐阜県としての活動母体を整備しておくことが求められる。「ぎふライチョウ保全研究会」がそのような役割になるように、メンバーと尽力したい。

様々な活動主体と連携しながら、生息域内外での保全活動や調査研究に加え、普及活動や保全教育など、様々な観点から取り組みを継続していかなければならない。本シンポジウムを通して、ライチョウの現状と環境省や JAZA 等による国の保護増殖事業の最新情報を知り、そしてそれぞれの生息地での活動を考える、あるいはさらに応援していただけるきっかけとなれば、開催者として本望である。

最後に、本シンポジウムでは講演いただいた方々以外にも多くの方に関わっていただいたので、一部を紹介したい。まず、今年 5 月に日本野鳥の会岐阜 飛騨ブロックが中心となり高山市で開催された「ライチョウ展+SDGs」（巻末にチラシ掲載）は、本シンポジウム開催の推進力になっている。また、ライチョウをはじめとした野生動物の剥製標本を、田中正至様（高山市在住）や岐阜県博物館などからお借りし、会場内に展示することができた。一部の剥製標本は、岐阜大学教育学部美術教育講座の 1 年生によって水彩画として描かれ（奥村晃史先生の授業）、それらの学生作品を展示させていただいた。

さらに、ライチョウ会議ぎふ大会（2020 年）開催の頃から言い続けてきたライチョウとの身近な接点作りとしてのライチョウ菓子の販売（当時、県内産のライチョウに関係するお菓子はなかった）は、岐阜大学社会システム経営学環（三井 栄 先生）の学生たちと和菓子処緑水庵および Princess Branche Pâtisserie Kura によるプロジェクト「ぎふっくらいちょう」として今回実現された。そして、同時に、生物多様性を軸に事業展開されている、いきものクッキーアート専門店 kurimaro collection 様によって、ライチョウクッキーアート（換羽シリーズ）としても実現した。それぞれの特徴を生かした商品を、今回それぞれの主体からお披露目いただけることになった。

他にも、普及啓発グッズとして、紙飛行機作家のアンドリュー・デュアー先生によって制作されたライチョウのリアルな紙飛行機も、今回の会場でお披露目され、初飛行（飛翔）する。岐阜県との連携で開発され、今回配布する。また、岐阜大学工学部附属宇宙研究利用推進センター（西田 哲 先生ら）のご厚意により、人工衛星 GHS-01「らいちょう」のロゴ（前頁掲載）のステッカーを提供いただいた。

当研究室の主たる繁殖研究分野に関しては、JAZA の 2025 年度 MUGF 生物多様性保全研究助成で、富山市ファミリーパーク（秋葉由紀様）を代表とする共同研究チームの 3 カ年の研究課題が採択された。ライチョウの生息域内外をつなぐ研究を展開していく予定である。

楠田 哲士（くすだ さとし）

岐阜大学応用生物科学部 教授。専門は動物保全繁殖学・動物園学。ぎふライチョウ保全研究会 発起人・会長、公益社団法人日本動物園水族館協会（JAZA）生物多様性委員会 外部委員、動物園水族館繁殖研究アライアンス 代表などを務める。2011 年からスバルバルライチョウ、2015 年からニホンライチョウの繁殖生理研究と普及活動を始め、JAZA・環境省の生息域外保全事業に関わる。

ぎふライチョウ保全研究会の設立 絶滅危惧種ライチョウの関心を 岐阜県で高めさらに保全を進める



岐阜大学 応用生物科学部 教授 ^{くすだ} 楠田 ^{さとし} 哲士
動物園生物学研究センター長

1965年5月10日、岐阜県の県鳥に“ライチョウ”が指定され、2025年で60周年です。文化財保護法で1955年に特別天然記念物に指定されてからも70周年になります。そんな記念すべき今年、日本山岳会岐阜支部と日本野鳥の会岐阜の有志で、ライチョウの保全に関する会を立ち上げたいとの相談を受け、私たち動物保全繁殖学研究室も加わり、「ぎふライチョウ保全研究会」を設立しました。

研究会の活動内容として、①県民を中心としたライチョウに関する普及啓発、②県内の生息数調査、③日本動物園水族館協会との生息域外保全に関する連携、④県内の行政や関係機関との連携・協力などを掲げています。

ライチョウは、本州中部の高山帯に隔離分布し、①頸城山塊、②北アルプス、③乗鞍岳、④御嶽山、⑤南アルプスに生息しています。このうち、岐阜県では飛騨地方の②③④に生息しています。飛騨市、高山市、下呂市が生息市で、生息山岳のほとんどが富山県や長野県との県境に位置することから隣県との連携は非常に重要です。

ライチョウを取り巻く環境は悪化し、推定個体数は1980年代の約3,000羽から、2000年代には2,000羽弱にまで減少しています。2012年に種の保存法に基づく保護増殖事業が開始され、環境省や日本動物園水族館協会等が、生息地での生息域内保全や動物園での生息域外保全、さらに野生復帰を活発に進めています。特に乗鞍岳は有数のライチョウ生息地で、個体数が比較的安定していることから、保全活動の試行の拠点になっています。

Google検索量を指標とした 都道府県ごとのライチョウ関心度

2005～2010	2010～2015	2015～2020	2020～2025
富山県* 100	富山県* 100	富山県* 100	富山県* 100
石川県 52	長野県* 38	長野県* 57	長野県* 81
福井県 45	石川県 33	石川県 25	石川県 28
京都府 22	福井県 27	福井県 18	岐阜県* 27
長野県* 21	島根県 17	山梨県 16	山梨県 25
奈良県 19	滋賀県 16	岐阜県* 15	福井県 20
新潟県 17	奈良県 14	滋賀県 12	東京都 18
大阪府 16	岐阜県* 13	東京都 12	新潟県 17
岐阜県* 16	京都府 13	京都府 12	京都府 16
和歌山県 16	新潟県 12		栃木県 16

1位を100とした場合の相対値。*県鳥に指定している県。

絶滅山岳であった中央アルプスでは、駒ヶ岳での野生復帰事業が2019年から始まり、乗鞍岳は大きな貢献を果たしてきました。野生復帰が順調に進み、中央アルプスは6カ所目の生息域として自立個体群が確立しつつあります。全体的な状況を踏まえ、環境省レッドリストの絶滅危惧カテゴリーが絶滅危惧IB類からII類へ引き下げられる可能性が出てきています。他の山岳の状況も好転し、その先の保護増殖事業の終了へと進展することを願っています。

ライチョウの存在は、豊かな山岳環境があることの象徴でもあります。岐阜県は、北部の飛騨地方と南部の美濃地方で環境が異なり、ライチョウは飛騨地方の一部にしか生息していませんが、県の自然のシンボルとして捉えてほしいと思っています。ライチョウが生息できる飛騨地方の高山環境は、美濃地方に豊富な水と淡水魚などを育み、それが農業や、鵜飼・美濃和紙といった特有の文化を育んできました。ライチョウや高山の生物多様性を保全することは、文化・歴史の多様性を保全することにもつながっているはずです。県を代表する鳥は、鵜飼の鵜でもありライチョウでもあり、それは自然や文化の豊かさの象徴なのです。

岐阜県民のライチョウに対する関心度は、県鳥に指定する3県で比べると、富山県と長野県に比べ非常に低い状況です。しかし、過去5年間ごとで比較すると相対的な関心度は上昇しています。2020年に岐阜大学で誘致した第19回ライチョウ会議ぎふ大会（2日間でのべ500名以上参加）や以降の様々なイベント等が奏功していると信じています。ライチョウのことや岐阜の生物多様性を、県民に広く知っていただけるよう今後も様々な企画を計画していきます。



私が初めて出会った野生のライチョウたち（乗鞍岳、2013年6月）

▶ 動物保全繁殖学研究室
<https://www1.gifu-u.ac.jp/~lar/>



ライチョウ紹介パネル

岐阜県博物館 作成

岐阜県博物館・岐阜大学連携企画「絶滅から救え！ ぎふの鳥ライチョウ」
(2024 年 4～9 月, 岐阜県内の複数の大型ショッピングセンターなどを巡回)

名古屋大学博物館・岐阜県博物館・岐阜大学連携企画 スポット展示「ライチョウ展」
(2024 年 8 月 20 日～10 月 19 日, 名古屋大学博物館)

つなぐ食・農・健康・環境フェア in 東海学院大学
(2025 年 10 月 18 日・19 日, 東海学院大学)



ぜつめつ すく とり 絶滅から救え！ ぎふの鳥 ライチョウ

岐阜県は、標高3,000メートルを超える飛騨山脈から木曽三川が流入する濃尾平野まで、地域によって気候や地形に大きな差があり、多種多様な生物が見られます。なかでも、ライチョウは、御嶽山、乗鞍岳及び飛騨山脈に生息し、岐阜県の豊かな自然を象徴しており、県の鳥にも指定されています。しかし、岐阜県内では、ライチョウは飼育されておらず、高山に行かないと見る事ができません。一方、同じく県の鳥に指定されている富山や長野では、動物園や博物館で飼育個体を見ることができ、ライチョウは身近な存在です。

現在、ライチョウは絶滅の危機にあり、さまざまな方法で保全活動が行われています。そのなかで、乗鞍

岳（岐阜県と長野県の県境）に生息するライチョウは重要な役割を果たしています。ぜひ、ライチョウのことを知り、岐阜県にすることに誇りを持ってほしいと思います。(楠田)

ぎふライチョウ保全研究会
岐阜大学応用生物科学部 動物保全繁殖学研究室
岐阜大学動物園生物学研究センター
日本野鳥の会岐阜
日本山岳会岐阜支部
岐阜県獣医師会
野生動物救護獣医師協会岐阜県支部
岐阜県博物館
岐阜県環境生活政策課
＊画像：中央アルプスのライチョウ（提供：環境省）



ライチョウってどんな鳥？

分布 ライチョウはキジのなかまで、本州の高山帯（火打山、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山、中央アルプス、南アルプス）で見られます。このうち、中央アルプスにいたるものは、2018年に確認された一羽の雌に加え、2020年以降、乗鞍岳や動物園から移されたものです。

すみかと**子育て** ライチョウは、春から秋にかけて、高山帯で繁殖し、ハイマツの下に巣をつくるのが多く、巣材にはハイマツの枯葉などを使います。雌は6月ごろから平均6個（4個から8個）の卵を産み、雛は、抱卵から22日でふ化します。雌は約3か月にわたり巣立った雛の世話をします。雛は秋には雌親から離れ、他の雛たちと群れて行動します。冬になると、標

高が低いオオシラビソやダケカンバなどの林へ下り、翌年の春までに高山帯に戻ります。

えさ ライチョウのえさは、季節によって変わりますが、基本的には植物です。6月上旬の残雪期には、ガンコウラン、コケモモ、ダケカンバなどの芽を食べ、抱卵を始める6月中旬には、さまざまな植物の芽、葉、花がえさとなります。8月以降はクロマメノキやコケモモなどの果実を利用し、冬の時期は、ダケカンバなどの冬芽を食べて過ごします。

（説田）

*画像：乗鞍岳のライチョウ（提供：縞田哲士）



あら てんてき 新たな天敵

ライチョウの個体数は約3,000羽(1980年代)から約1,700羽(2000年代初期)に減少し、絶滅のおそれが高くなっています。数が減った原因はいくつかありますが、低山で暮らす動物の高山帯への侵入は大きな問題になっています。

ライチョウの主な天敵はオコジョやイヌワシなどでしたが、キツネ、テン、チョウゲンボウ、カラス類など、低山で暮らす捕食動物の高山帯への侵入が増えていると考えられ、新たな天敵となることが危惧されています。また、ニホンジカやニホンザルなどの中大

型哺乳類が高山帯で見られるようになり、えさとなる植物を食べるなど、ライチョウの生息を脅かしています。現在、一部の生息地では、大型のケージによるライチョウ母子の保護やテンなどの駆除が行われています。（説田）

*画像左：ライチョウを襲うニホンザル（提供：環境省）

*画像右：乗鞍岳（2566m付近）で撮影されたキツネ（提供：岐阜県野生動物管理推進センター）



ちゅうおう ふっかつ
中央アルプスで復活したライチョウ

中央アルプスに生息していたライチョウは、1965年以降、確認されていませんでしたが、2018年の7月、登山者によって撮影された1羽の雌の写真が大きな話題になりました。2015年頃から定着し、無精卵を産んでいたようです。遺伝子解析の結果、この個体が乗鞍岳または北アルプスから飛来したものとされたため、中央アルプスのライチョウは、乗鞍岳のライチョウを活用しながら、数を増やすことになりました。

はじめ、無精卵を有精卵に交換する方法で、ライチョウを増やす試みが行われましたが、孵化した雛がすべて死亡したため、うまくいきませんでした。2020年

の夏、乗鞍岳から3家族（母雌3羽、雛16羽）が中央アルプスの駒ヶ岳へ移され、天候不順や天敵から守るため、避難用の大型ケージで飼育されました。保護した雛は無事に育ち、翌年から繁殖しました。その後、動物園で殖やしたライチョウも中央アルプスに移され、繁殖に参加し、順調に数が増えています。2024年の調査で、約130羽と推定されています。（説田）

*画像：中央アルプスで繁殖した母ライチョウとその子どもたち（母ライチョウは動物園育ち）（提供：環境省）



に ほんだうぶつえんすいぞくかんきょうかい かんきょうしょう れんけい
日本動物園水族館協会と環境省の連携

2012年に環境省がライチョウ保護増殖事業を開始したことも契機となり、生息地での生息域内保全や動物園での生息域外保全がさらに活発に進められています。岐阜県と長野県の県境にある乗鞍岳は、一大生息地で、比較的多くの個体が安定して生息しているため、保全活動の拠点・出発点になっています。

生息域内保全法のひとつである生息地での「ケージ保護」は、乗鞍岳での研究成果をもとに開発され、実証試験が行われました。また、生息域外保全は、公益社団法人日本動物園水族館協会と複数の加盟動物園が協力して2015年と2016年に乗鞍岳で一部の卵を採集し、動物園に運ばれスタートしました。ニホンライチョウの飼育開始前には、別亜種スバルパラライチョウを導入して技術開発が行われました。

ニホンライチョウの飼育・繁殖の技術が確立しつつあり、飼育下繁殖数も増え、現在は、上野動物園、富山市ファミリーパーク、大町山岳博物館、いしかわ動物園、那須どうぶつ王国、横浜市繁殖センター、長野市茶臼山動物園、横浜市立金沢動物園で飼育されています。一部の施設を除き、展示公開されています。

絶滅山岳となっていた中央アルプス駒ヶ岳でのライチョウの復活事業が、2019年と2020年に乗鞍岳の卵や家族からの移植、2020年と2021年に動物園うまれの卵と家族の野生復帰によって行われています。すべての原点が、乗鞍岳にあります。（楠田）

*画像：那須どうぶつ王国のライチョウの野生復帰、中央アルプス駒ヶ岳への移送（提供：那須どうぶつ王国）



どうぶつえん だいがく 動物園と大学による繁殖生理研究

ライチョウの繁殖生理について、岐阜大学応用生物科学部 動物保全繁殖学研究室では、2011年から動物園と、別亜種のスバルライチョウ、2013年から野生のニホンライチョウ、2015年から動物園のニホンライチョウを対象に、動物園の方々と野外のライチョウ研究者と共同で、糞中の性ホルモン代謝物濃度の変化を分析しています。通常は採血して血液中の性ホルモン変化を調べないといけませんが、継続的な採血はライチョウへのストレスになるため排泄糞を使った分析法を確立しました。

ライチョウの卵巣や精巣の状態を、糞中の性ホルモン代謝物濃度の変化から推定することは、飼育・繁殖技術の確立や向上につながります。光（照明）や気温などの環境変化に伴ってどのように変化するか、野生

での性ホルモン変化に近づけるにはどうすればよいかを調べています。糞中の性ホルモン代謝物濃度の変化の分析とともに、換羽、体色、雄の眼高上肉冠、行動といった外観の変化、採食量や体重の変化などの情報との関連も調べています。これらの研究を通して、孵化率や成育率の高い卵を産ませるために、よりよい飼育条件の設定につなげようとしています。

現在、上野動物園、富山市ファミリーパーク、大町山岳博物館、いしかわ動物園、横浜市繁殖センター、那須どうぶつ王国、長野市茶臼山動物園と共同で繁殖生理研究を進めています。（楠田）

*画像：動物園のライチョウの糞中の性ホルモン代謝物濃度を分析中
（左：岐阜大学応用生物科学部 動物保全繁殖学研究室の実験室）

えが 描かれたライチョウ

江戸時代の中ごろから、信仰登山が盛んになったため、高山帯に生息するライチョウの存在が知られるようになりました。江戸幕府の第8代將軍徳川吉宗は、1744（延享元）年、飛騨の役人に対し、ライチョウの捕獲を命じ、鳥屋源助・源次郎父子らが乗鞍岳で5羽のライチョウを捕獲しました。2羽の雄はすぐに死にましたが、残る3羽は江戸まで運ばれ、吉宗に献上されました。このときに描かれた写生図は、絵師や本草学者らによって模写され、いくつかの図が今日に残っています。

一方で、ライチョウは江戸時代の花鳥図（決められた画題と構成を持つ觀賞用の絵画）の画題でもありま

した。長寿を象徴する松と神の山（白山）に生息するライチョウの夫婦を描き、後鳥羽院の和歌が添えられています。当初は天皇や公家の間で鑑賞されていましたが、絵馬や版画などが庶民にも流通しました。江戸時代の中ごろには、ライチョウの実態が明らかになりましたが、花鳥図では、キジのようなライチョウの図像が、継承すべき古典として、描き続けられました。（説田）

*画像：徳川吉宗に献上されたライチョウ（出展：国立国会図書館デジタルコレクション、伊藤圭介編『錦葉禽譜 2編20巻』）。赤丸内は花鳥図に描かれたライチョウ（原資料：岐阜県博物館）



理科室のライチョウ

戦前、学校の理科室には、たくさんの剥製や模型があり、これらは博物学の教材として活用されていました。しかし、現在のこれらの標本は学校教育で使われることがなくなりました。岐阜県博物館では、これまで、多くの学校から、不要になった剥製を受け入れてきました。これらのなかで、最も数が多いのがライチョウの剥製でした。

戦前の旧制中等学校（現在の高等学校）では、博物学の単元があり、動物学、植物学、鉱物学、生理衛生が教えられていました。ライチョウは動物学のなかで取り上げられ、夏と冬で羽毛が生え変わり、目立たな

い羽毛を持つことが解説されています。大正後期になると、ライチョウは図入りで紹介されるようになりました。ライチョウは県内に分布することから、岐阜県の学校では、教材として購入したところが多かったのかもしれませんが。ライチョウの剥製は、明治から大正のはじめにかけては3〜7円、大正のおわりから昭和のはじめにかけては18〜22円で販売されていました。

（説田）

*画像：戦前のライチョウの剥製（原資料：岐阜県博物館）



ぎふライチョウ保全研究会

特別天然記念物のライチョウは、岐阜県では1965（昭和45）年5月10日に、県のシンボル「県鳥」として指定されています。5月10日は岐阜県民のライチョウの日です。2025年は県鳥指定60周年になり、また特別天然記念物指定70周年でもあります。

ライチョウは、本州中部の高山帯に隔離分布していますが、岐阜県にも飛騨地方に複数の生息地があります。ライチョウの生息環境は悪化し、日本のライチョウ全体としては絶滅の危機にあります。2012年に種の保存法に基づく保護増殖事業が開始され、環境省や日本動物園水族館協会等が、生息地での生息域内保全や動物園での生息域外保全、さらに野生復帰を活発に進めています。

ライチョウは、岐阜県の自然環境や生物多様性の象

徴でもあり誇りです。そのライチョウの保全を推進するため、岐阜大学、日本野鳥の会岐阜、日本山岳会岐阜支部を中心に、県内の関係者有志が集まり、岐阜県では初めてのライチョウ保全のプラットフォーム「ぎふライチョウ保全研究会」を2025年に発足しました。これまでの個々の活動から、今後は関係者一丸となつて、ライチョウ保全に関わるさまざまな活動（調査研究、情報共有、技術継承、普及啓発イベント企画、グッズ開発、関係機関との連携強化）に取り組みます。今後、ますます協力者の輪を広げることで、ライチョウの保全、生物多様性の保全に貢献したいと思っています。（研究会代表：楠田）

*画像：乗鞍岳（富士見岳）の雄ライチョウ（提供：伊藤恭博）

国の特別天然記念物登録70周年・岐阜県鳥指定60周年記念企画

THE JAPANESE ROCK PTARMIGAN

ライチョウ展



+SDGs

ライチョウの未来は、わたしたちの未来—

ライチョウって
どんな鳥？



ライチョウに
せまる危機

わたしたちに
出来ること



消えてゆく
生物多様性



ライチョウ
手作りコーナー

けしゴムはんこのカード
ストーンペインティングが
ぬりえ
...



講演会

『飛騨山脈ライチョウ
共和国建国の提言』

5月11日 13:30-15:00

講師 小野木 三郎



Takayama Civic Culture Center

May 10-11, 2025

5月 10日(土)
10:00~20:00
11日(日)
10:00~16:00

高山市民文化会館

共催 日本野鳥の会岐阜 飛騨ブロック
乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

協力 中村浩志国際鳥類研究所

後援 高山市/高山市教育委員会、

(一社)高山市文化協会、下呂市/下呂市教育委員会

飛騨市教育委員会、岐阜大学 地域ラボ・高山

入場
無料

ライチョウが
県の鳥って
知ってる？

フイズ
もあるよ！



ライチョウ
岐阜県鳥
60th

※ 当事業は公益財団法人たかしん地域振興協力基金の助成を受けております。

絶滅させないために、わたしたちができること

ライチョウ
飼育園館

市立大町山岳博物館・那須どうぶつ王国・長野市茶臼山動物園・いしかわ動物園

恩賜上野動物園・富山市ファミリーパーク・横浜市繁殖センター・横浜市立金沢動物園

中央アルプス
ライチョウ復活
プロジェクト

動物園から中央アルプスへ 野生復帰の挑戦！

中央アルプスでライチョウ復活が成し遂げられています

1羽だった飛来雄も5年連続でヒナを育てている（令和7年7月1日）

動物園で増やしたライチョウを山に戻すことにより、絶滅地域の中央アルプスで復活プロジェクトを進めています。中央アルプスのライチョウは5年間でたった1羽から約190羽までになりました。令和7年9月には最後の野生復帰事業が実施されます。

環境省と（公社）日本動物園水族館協会は生物多様性保全の推進に関する協定を結び絶滅危惧種の保全活動を行っています。



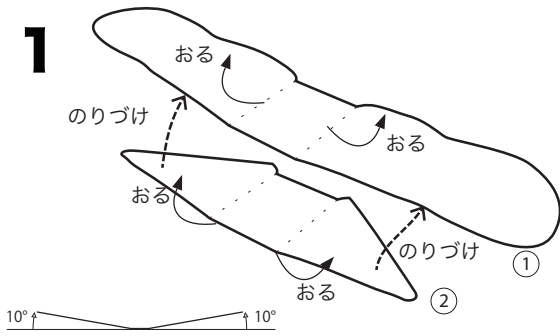
公益社団法人
日本動物園水族館協会
JAPANESE ASSOCIATION OF ZOOS AND AQUARIUMS

環境省信越自然環境事務所・林野庁中部森林管理局・長野県・駒ヶ根市・宮田村・中央アルプス観光（株）・宮田観光開発（株）
お問い合わせ TEL: 026-231-6573（環境省）

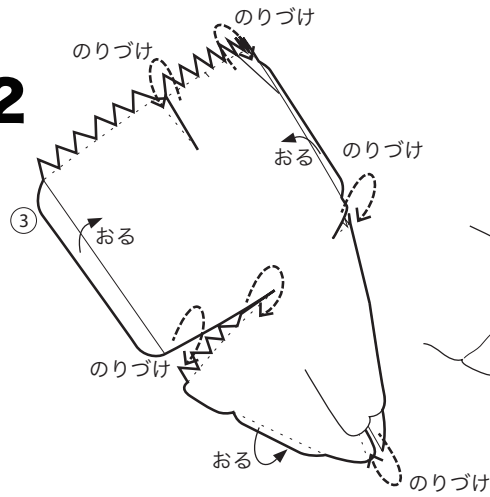


2025年8月

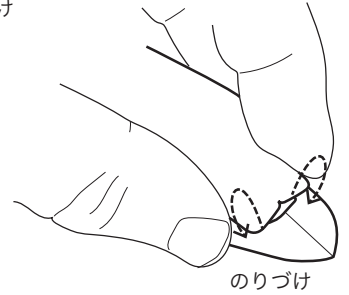
1



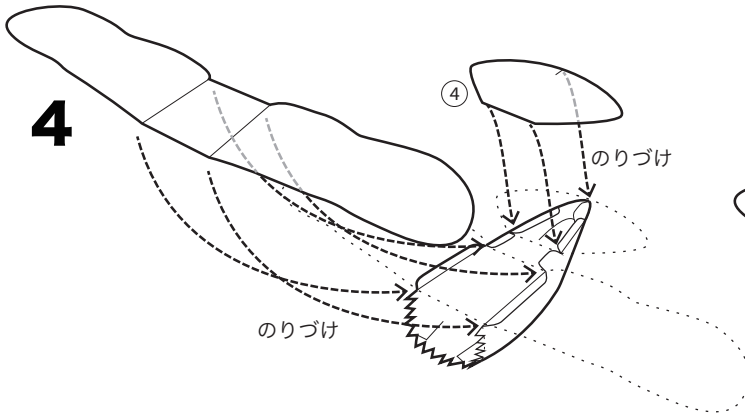
2



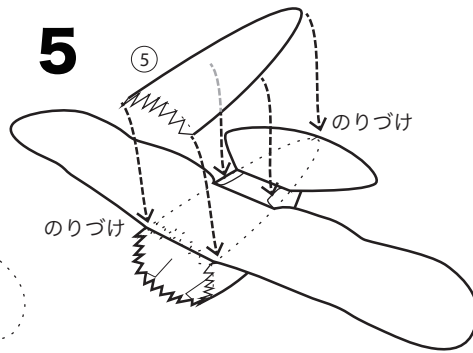
3



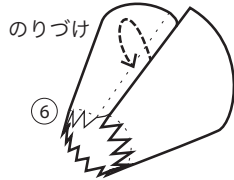
4



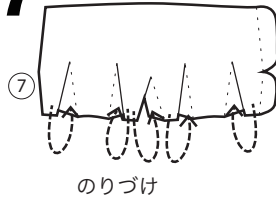
5



6



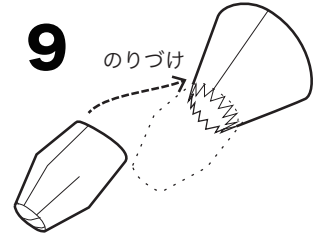
7



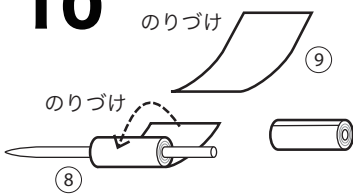
8



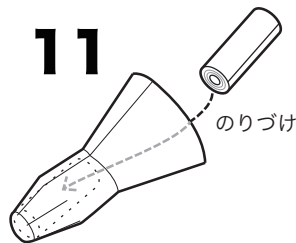
9



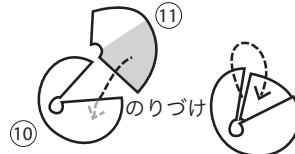
10



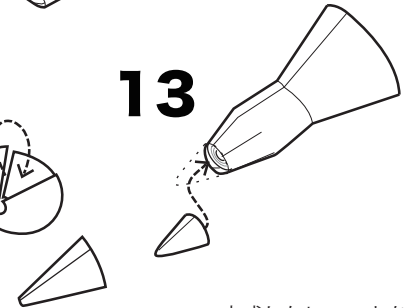
11



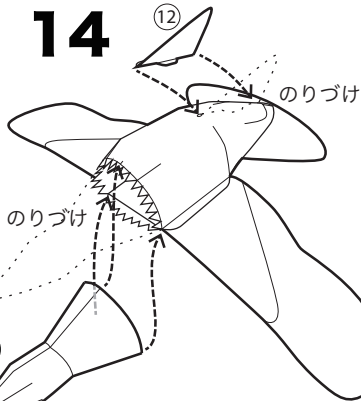
12



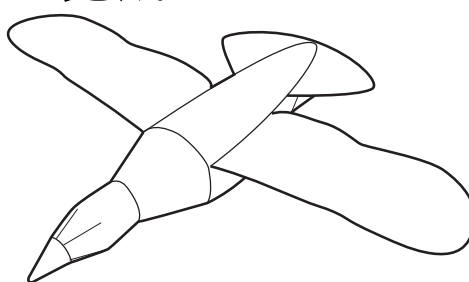
13



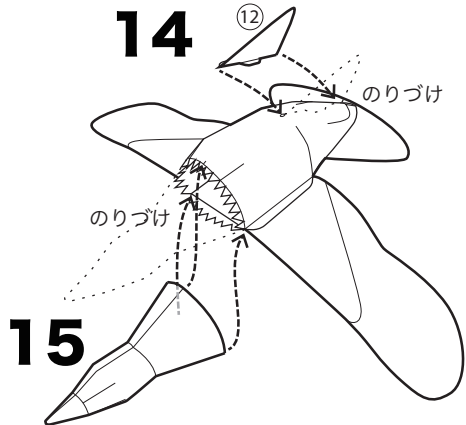
14



完成



15



完成したヒコークを飛ばす前に、正面からよく見て、狂いがあれば直しましょう。主翼や尾翼を優しくつまんで、ひねりながらまっすぐになるまで調整してください。



広い場所でまっすぐ前に、そっと投げて飛ばしてください。

たった1羽のライチョウからわずか5年で200羽になった奇跡のストーリー！



甦れ！ 神の鳥ライチョウ

著者 中村浩志

発行 山と溪谷社

四六判

296頁（カラー口絵8頁含む）

定価1980円（本体1800円＋税10%）

ISBN978-4-635-23013-1

2025年9月1日発売

祝！
秩父宮記念
山岳賞受賞

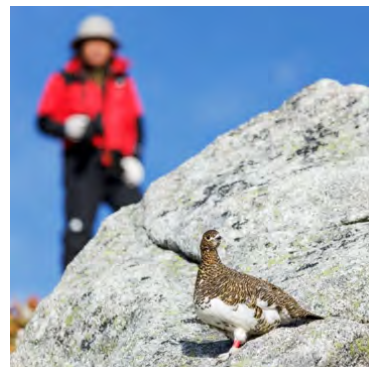
ライチョウが甦った山を
歩ける喜び。
奇跡は「祈る」のではなく
「つくる」ものだと
胸が熱くなりました。

漫画家・鈴木ともこ



■内容

- 序章 中央アルプスに半世紀ぶり雌が飛来
- 第1章 過去の事例から学ぶ
- 第2章 解明された日本のライチョウの隔離と分化の歴史
- 第3章 卵差し替えの試み
- 第4章 北岳でのケージ保護の成果
- 第5章 中央アルプスでの事前調査結果
- 第6章 本格的に開始された復活事業
- 第7章 背水の陣となった乗鞍岳のケージ保護
- 第8章 悪天候に阻まれたヘリ輸送
- 第9章 20羽からのスタート
- 第10章 ケージ保護した家族を動物園に降ろす
- 第11章 腸内細菌とアイメリア原虫の課題
- 第12章 動物園に降ろした家族の雌親が死亡
- 第13章 動物園でライチョウが育てた雛を山に戻す
- 第14章 第20回ライチョウ会議駒ヶ根・宮田大会
- 第15章 復活した中央アルプスのライチョウ
- 第16章 最後の課題 野生復帰技術の確立
- 第17章 雛の輸送中に起こった信じられない事故
- 第18章 日本のライチョウの残された課題
- 第19章 日本のライチョウの未来



あそぶ、まなぶ、いきる。

山と溪谷社

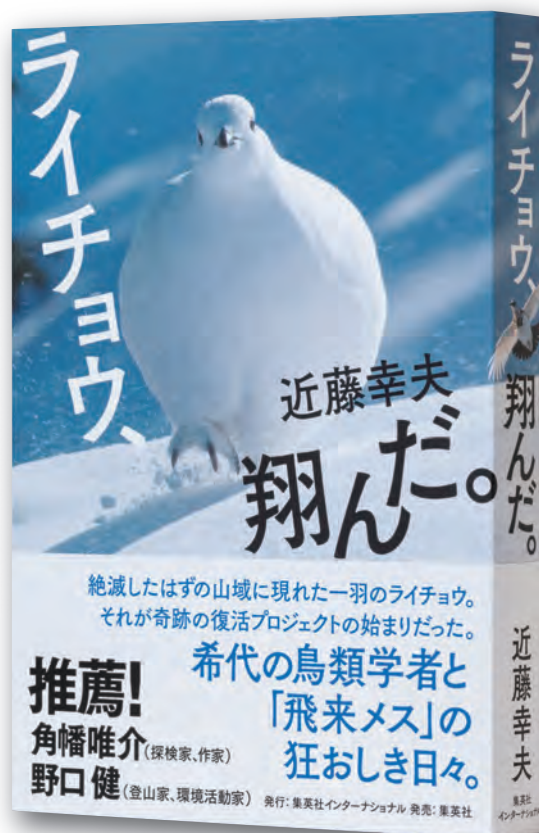
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1丁目105

●お問合せ info@yamakei.co.jp

ライチョウ復活プロジェクトを追った熱血ノンフィクション！

『ライチョウ、翔んだ。』

近藤幸夫



半世紀も前に絶滅したはずの中央アルプスに、突如現れた一羽のライチョウ。

「飛来メス」と、稀代の鳥類学者・中村浩志が出会い、前代未聞のライチョウ復活プロジェクトが動き出した。

気候変動、人間による環境破壊、様々な天敵の襲来……。次々と襲い掛かる難題に、独自の発想、最先端科学の知見、尽きることのない情熱によって立ち向かう「チーム中村」。

氷河時代から生き残り、日本の高山だけに残された「奇跡の鳥」を絶滅から救うため、プロジェクトに邁進する人々の姿を描く。

★長野朝日放送制作

「雷鳥を守るんだ “神の鳥”その声を聴く男」でも取り上げられたプロジェクトに密着！

2024年4月26日(金)発売

【著者プロフィール】 近藤幸夫(こんどう・ゆきお)

山岳ジャーナリスト。1959年、岐阜県生まれ。信州大学農学部林学科卒業。1986年朝日新聞社に入社。富山支局で山岳取材をスタート。1988年、大阪本社運動部に配属され、南極や北極、ヒマラヤなど海外取材を経験。2013年、東京本社スポーツ部から長野総局に異動。2021年12月、朝日新聞社を早期退職。長野市を拠点に活動している。日本山岳会、日本ヒマラヤ協会、信州大学学士山岳会に所属。

全国の書店・ネット書店で予約受付中！

本書の詳細はこちらから

定価：2,200 円（税込）四六判ハードカバー 288 ページ（内カラー口絵 8 ページ）

発行：集英社インターナショナル 発売：集英社

☎03-5211-2630 <https://www.shueisha-int.co.jp/>



神の鳥ライチョウの生態と保全

日本の宝を未来へつなぐ

好評発売中

編著：楠田哲士

B5判 288頁 オールカラー
定価5,280円(本体4,800円+税) ISBN 978-4-89531-579-1

国指定の特別天然記念物であり、
絶滅危惧種のニホンライチョウ。
古くから日本人に愛されてきた美しい鳥のために、
私たちが知るべきこと、できることとは？

生態とその魅力、日本人との関わり方の歴史、現状と課題、そして未来について、ライチョウを取り巻く状況を網羅的に知ることができる、ライチョウ本の決定版。各分野の70名を超える専門家が執筆にあたり、わが国で取り組まれている、あるいは挑まれてきた、この鳥についての研究や保全の全体を俯瞰できる内容。ライチョウの研究や保全活動に携わる方はもちろん、登山者や野鳥愛好家など、ライチョウに興味があるすべての方におすすめの一冊。



生態と分類

世界と日本のライチョウの分類・分布と生息環境、
体の特徴、1年の生活、名前の由来などを紹介。



日本人との関わり

江戸時代から続く日本人とライチョウとの関わりや山岳信仰との関係、関連する法律などをまとめ、ライチョウの捕獲と保護の歴史について考察。



現状と課題・保全活動

各生息地における個体数の変化や野生動物の侵入といった課題、
生息域内での保全にむけた取り組みや計画、日本アルプスでのニホンライチョウ復活プロジェクトといった最新情報、動物園を中心とした生息域外保全における研究や将来展望を示す。





ぎふっくらいちょう 販売決定！

2025年

10月1日 水

📍 THE GIFTS SHOP

クッキー缶販売開始！



クッキー
300円～



夏のヒナと冬のオスの
かわいいアイシングクッキー♪

🍓 イベント販売 🍓

学生が販売します！

10月18日

【岐阜・柳ヶ瀬】
SUNDAY BUILDING MARKET

11月1日・2日

【岐阜駅周辺】
ぎふ信長まつり



卵から成鳥まで♪
餅とねりきりの3セット

和菓子
1,100円

／ 私たちが開発をすすめています！／



詳細は
こちらをチェック！

公式Instagram



開催体制

主 催

国立大学法人東海国立大学機構岐阜大学，岐阜県，ぎふライチョウ保全研究会

共 催

岐阜大学応用生物科学部，日本野鳥の会 岐阜，公益社団法人日本山岳会岐阜支部，
公益社団法人岐阜県獣医師会，野生動物救護獣医師協会岐阜県支部

後 援

環境省信越自然環境事務所，公益社団法人日本動物園水族館協会，高山市，飛騨市，下呂市

岐阜大学内協力

応用生物科学部動物保全繁殖学研究室，動物園生物学研究センター，
アーカイブ・コア管理運営室，応用生物科学部附属野生動物管理学研究センター，
社会システム経営学環三井研究室，教育学部美術教育講座

事務局

ぎふライチョウ保全研究会

〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1（岐阜大学応用生物科学部 動物保全繁殖学研究室内）

岐阜県 環境生活政策課 生物多様性係

〒500-8570 岐阜県岐阜市藪田南 2-1-1

電話 058-272-8231

ライチョウ保全シンポジウム「ライチョウの未来、新たなステージへ」講演要旨集

発 行 日	2025 年 10 月 5 日（令和 7 年度岐阜大学技術交流研究会助成を受けて 200 部印刷）
発 行 者	ぎふライチョウ保全研究会
編 集	楠田 哲士
印刷・製本	株式会社プリントバック
事 務 局	ぎふライチョウ保全研究会 〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学応用生物科学部 動物保全繁殖学研究室内 TEL：058-293-2862 E-mail：kusuda.satoshi.y5@f.gifu-u.ac.jp



©岐阜県